

- ☒ 話すこと ☒ 書くこと ☒ 個に応じた教材の作成や指導の充実 ☒ 授業での活用 ☒ 家庭学習での活用
☐ パフォーマンステストでの活用 ☐ 課外活動での活用

実践の
ポイント

AIを活用した、生徒の習熟度に応じた個別最適化された学習の実現

実証概要

<校数> 10校(中学校:4校 高等学校:6校) <人数> 3,043名(中学校:443名、高等学校:2600名)
 <学年> 中学校:第2、3学年、高等学校:第1、2学年
 <アプリ等> 中学校:TerraTalk(ジョイズ株式会社) 高等学校:GELP (ベネッセコーポレーション)
 <AI機能について>
 Terra Talk: AIとチャットボット形式の個別スピーキング練習及び単語学習や文法、発音練習、会話ロールプレイ
 GELP: 生徒の興味関心に応じた毎日の課題配信、作文添削・音声認識による発音の評価及び課題提出等

AIの効果的な活用方法や取り組み (AI英語モデル校事業)

●生成AIのプロンプトを活用した授業実践

AIの欠点は、プロンプトを適切に設定しないと反論しないこと、すべてを肯定することである。生徒の発話等に対し、肯定し答えを与えるのではなく、改善のためのヒントを与えることや、質問を投げかけたり、質問をさせたり、反論させるプロンプトを設定。それを生徒と共有することで、生徒の思考を促すとともに、インプット・アウトプットの機会の増加を図った。

●AIによる個別練習から、対人活動(実践)への段階的な接続

AIによる個別練習から人同士の対話活動へと至るプロセスを3つの段階で構成し、生徒の主体性(Agency)を引き出す指導モデルとした。【Step1】の「基礎・基本の徹底」で、AI学習アプリを活用して「誰にも聞かれずに何度も挑戦できる」環境を確保し、即時フィードバックを通じて発音や文法の基礎を固めながら、発話に対する心理的ハードルを低減する。【Step2】の「思考・表現の深化」では、生成AIを「思考の壁打ち相手(アドバイザー)」として活用し、AIからの質問を通じて自らの考えを深めたり表現を洗練させたりする準備を行う。【Step3】において、これらで培った内容を基に、自信をもって実際の対人コミュニケーションを行うことで、「話したい」「伝えたい」という意欲を最大化させ、効果的な対話活動へと接続する。

実践成果の検証結果 (AI英語モデル校事業)

①児童生徒の英語力の変化

高校:CEFR A2以上の総数
 R6 1年生773→R7 1年生880
 (+14%)
 中学校:speakingの伸び
 (自分自身のこと) 1回目52.6% → 2
 回目76.3%
 TerraTalkにおけるSpeakingタスクの
 練習量が顕著であり、今回の伸びにつな
 がったと分析される。

②児童生徒の関心・意欲の変化

話す力において、387人中269人がAI
 を活用して話す力が付いたと回答。書く力
 において、1626人の回答中1106人が、
 AIを活用して成績が伸びたと回答。アプリ
 活用ログの分析から、課題完了数100
 以下でスコア600以下課題完了数300
 を超えた層からスコア800まで上昇。

③教師の指導の変化

AIの活用により作文添削の時間を短縮
 し、ディスカッション等による学びの共
 有を実施(充実)することができた。また
 英語で発信するにあたり、背景知識
 不足による目的・場面・状況設定の弱さ
 があったため、GELPのニュース記事配
 信機能を利用し、時事問題に触れるこ
 とによる動機付けが可能となった。

AI英語活用リーダーの育成や普及に関する取り組み (AI英語活用リーダー事業)

県内全6地区における授業公開および、中学校モデル校2地区における中高教員の相互参加

高校においては、授業公開案内を全県へ発出。人同士のコミュニケーションに必要な土台作りとしてのAI活用の有効性を普及する
 目的で、具体的なプロンプトの共有、GELPによる個人の興味関心に基づく教材配信、音声認識機能による課題の提出と習熟
 度の確認機能など、生徒の取組状況を可視化する方法を共有し、特にAI活用の経験のない教員にとって有意義な研修となった。
 中学校においては、授業公開の案内を域内の高校に発出。中高のAI活用授業を相互参観を可能にし、交流の機会を持った。特に
 、中学生に顕著な英語を話すことへの「恥ずかしさ」や間違えることへの「抵抗感」に対し、恥ずかしがらずに何度も挑戦できる場
 としてのAI活用(常活動におけるTerraTalkの定着)が有効であることを強く発信した。

事業全体を通じた成果や課題、今後の取り組み (AI英語モデル校事業・AI英語活用リーダー事業)

生成AIは今後ますます発達していく。また、新しいものへの習熟は生徒の方が上手であり、教師がAIに触れずにいることは、
 教員間の指導力格差を生み、そのまま生徒の学力格差へとつながる。
 授業公開の案内範囲を広げ、授業研究の内容を拡充したい。一部の学校で、授業研究において大学教授等、有識者による指
 導助言を取り入れていた。授業研究とからめてワークショップ機能を充実させる取り組みを意識したい。